

古関裕而氏を活かしたにぎわいの創出に関する調査 経済民生常任委員長報告

経済民生常任委員会において行いました「古関裕而氏を活かしたにぎわいの創出に関する調査」の経過並びに結果につきましてご報告申し上げます。

本市の名誉市民である古関裕而氏とその妻、金子氏をモデルとした連続テレビ小説「エール」が令和2年3月30日より放送開始となり、全国的に古関氏と本市への関心が高まっております。

当委員会では、この状況を追い風として、本市の交流人口の拡大とまちなかのにぎわい創出につながる施策が必要であることから「古関裕而氏を活かしたにぎわいの創出に関する調査」を調査項目と決定し、令和元年10月より計19回の委員会を開催いたしました。

この間、市当局から詳細な説明を聴取するとともに、古関氏の功績と古関メロディーを継承するための中核となる古関裕而記念館へ、2度にわたり現地調査を実施いたしました。

また、参考人として、本市の音楽文化総合アドバイザーである三浦尚之氏を招致し、古関裕而氏を活かしたまちづくりの将来像や音楽、芸術を活かしたまちづくりがもたらす効果や魅力などについて聴取いたしました。

さらに、先進地として、音楽によるまちづくりに取り組んでいる静岡県浜松市、ジャズので地域活性化に取り組んでいる愛知県岡崎市、連続テレビ小説「半分、青い。」放送を活かしたにぎわいの創出に取り組んでいる岐阜県恵那市への行政視察を行うなど、詳細な調査を実施いたしました。

以下、調査の結果についてご報告申し上げます。

はじめに、本市が現在取り組んでいる、古関裕而氏を活かしたまちづくりの現状について申し上げます。

現在本市では、令和元年に策定した古関裕而氏を活かしたまちづくりの施策案である古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーに基づき、官民協働による様々な事業が実施されております。

「古関氏に触れ、親しむ」取組として、古関裕而記念館の展示リニューアルや古関氏の生涯や功績を紹介するマンガの小中学生への配布などが行われ、古関裕而メロディーバスの運行も始まりました。

また、「古関裕而のまち・ふくしまのまちづくり」の取組としては、本市オリジナルの「古関裕而のまち 福島市」ロゴを作成し、ポスターやフラッグなどによるシティードレッシングが行われ、駅前通りからレンガ通りにかけては、古関裕而ストリートの整備も進められております。

さらに、「古関レガシーを活かした新たな文化・観光振興」の取組としては、ロケツーリズムの推進やエール展の開催をはじめ、民間による音楽イベントなども開催され、古関氏にちなんだ様々なお土産品の開発も進んでおります。

一方、新型コロナウイルス感染症拡大により古関裕而のまち・ふくしまシンフォニーによる取組にも大きな影響を及ぼしております。

当初4月を予定していたエール展の開催やまちなか周遊バスの運行開始は6月からとなり、古関裕而記念音楽祭や古関裕而ゆかりのまちサミットについては、現在、内容等を検討している状況となっております。

そうした中においても、エール放送による波及効果は広がりを見せ、古関裕而記念館の来館者数は、6月1日の再オープン以降、8月末で18,532人となり、昨年同時期の約2倍の伸びとなっております。

9月以降もバスツアーの予約が相次いでおり、今後も来館者で賑わうものと予想されます。

次に参考人招致により、提言に関して得られた内容を申し上げます。

参考人からは、エール放送により盛り上がった古関氏や楽曲に対する機運をどのようにして、この先50年、100年先まで続くまちづくりへとつなげていくのが重要と示されました。

参考人の説明を受け、当委員会としては、古関氏や楽曲をきっかけに、音楽や文化を通じて子どもたちに夢や希望を持ってもらうことで、次の福島市を担う人材育成に取り組んでいくことの必要性、並びに市民に古関氏の功績や楽曲を伝え、語り継ぐことで福島市への愛着や誇りを持てる取組を続けることの必要性を認識したところであります。

次に、先進地の視察により提言に関して得られた内容について2点申し上げます。

1点目は、音楽文化の浸透には長い時間と長期的なビジョンが必要ということとであります。

浜松市では、昭和56年から音楽によるまちづくりに取り組み、40年近く継続することで、市民に音楽文化が根付き、音楽のまちを支える人材が数多く育ち、都市ブランドを形成するまでに至っております。

また、音楽によるまちづくりの方向性、将来像を示した文化振興ビジョンを基にまちづくりに取り組むことで、行政と市民、企業等が共通の目標に向かって進んでおります。

2点目は、テレビドラマ放送で得た資源の活用であります。

恵那市は、連続テレビ小説「半分、青い。」放送による効果を次につなげていくため、ドラマ放送終了後もロケセットの一部を譲り受け、それを活用し、観光客の誘客を図っております。

以上の調査結果を踏まえ、古関裕而氏を活かしたまちづくりをさらに推進させるため、以下3点について提言をいたします。

1点目は、エールレガシーの積極的な活用であります。NHKとの連携をさらに深め、エールで使用したロケセットや小道具等を譲り受け、駅周辺施設などで展示するなど、放送終了後も、エールを活かした観光PRを続け、まちなかの回遊性向上につなげるべきであります。

また、本市ホームページで一部のロケ地情報が公開されておりますが、ロケ地情報を一覧にしたロケ地マップを作成し、観光施設などに配置することで、観光客がロケ地巡りを楽しみやすい環境づくりを進めるべきであります。

2点目は、古関裕而記念館を中心とした近隣施設や、商工団体、他自治体、他事業との連携であります。先ほど述べましたとおり、エール放送の反響により、近年、例をみない数の来館者が古関裕而記念館を訪れておりますが、新型コロナウイルス感染症対策のため、一度に入館出来る人数を制限しており、混雑時は1時間以上の待ち時間が発生しております。

この待ち時間を活用するため、既に「エール村」により来館者が快適に過ごせるような取組が行われておりますが、隣接する音楽堂など近隣施設とさらなる連携を図り、一体となって訪れた方へのおもてなしのより一層の強化を図るべきであります。

加えて、市当局と商工団体が連携してまちなか回遊のためのしくみをつくり、その情報を古関裕而記念館から発信することや川俣町、本宮市との広域連携、金子氏のふるさとである豊橋市との交流促進も図るべきであります。

また、旅行代理店等と連携し、本市自慢の花見山やくだもの狩りと古関裕而記念館をセットにしたパッケージツアーの促進を図るべきであります。

本市では、春は花見山の花観光、6月初旬頃からはサクランボを皮切りに、モモ、ナシ、ブドウ、そして初冬のリンゴまで、季節を追って様々なくだものを楽しむことができ、市内外から多くの方が訪れます。

新たに整備されたバス駐車場を活用して、パッケージツアーを促進することで、より多くの方に気軽に古関裕而記念館を訪れる機会を提供することが出来ます。

3点目は、音楽文化の継承と音楽による人材育成、まちづくりについてであります。

本市で生まれ育ち、日本を代表する偉大な作曲家である古関氏の功績や楽曲を若い世代に継承していくことで、本市への誇りや愛着、将来への希望が生まれることから、継承の機会を増やし、継続していくべきであります。

子供達に古関氏の功績や音楽を継承する取組としては、既存の鼓笛パレードや合唱コンクール等での古関氏の楽曲の活用や、古関氏の楽曲をジャズやポップスなど様々なジャンルに編曲し、一堂に会する音楽フェスティバルを継続的に開催することで、少しずつ古関氏の楽曲が若い世代に浸透し、継承されていくことにつながると考えます。

さらに、古関氏の名を冠した作曲や編曲等のコンクールを創設し、市内外の音楽家に幅広く参加していただくことで、本市ゆかりの音楽家として成功するきっかけをつくり、人材の育成につなげていくべきであります。

このコンクールの開催により、古関氏の功績を継承していくとともに、10年、20年と継続することで市内外に認知され、古関裕而のまち・ふくしまの象徴的な事業となり得るものと考えます。

コンクール参加者が、その後、国内外で活躍することで、次世代にとっての夢や目標となり、ひいては音楽を通じた人材育成につながります。

これらの音楽によるまちづくりの浸透には継続的な取組が必要であります。短期的な施策に加えて、音楽文化の振興を図る長期的なビジョンを持ち、行政と市民、団体等が協働で目指すまちづくりの方向性を示すべきであります。

以上3点の提言をいたしました。最後に、調査にあたりご協力いただきました皆様に厚く御礼を申し上げます。

エール放送により、古関氏と本市に対する関心は一気に高まりました。新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらも、本市に多くの方が訪れ、にぎわいが生まれております。

この盛り上がりを一過性のもので終わらせることなく、「古関裕而のまち・ふくしま」をこれからも市内外へアピールすることが重要であります。

古関裕而氏を活かしたまちづくりにより、本市が、50年、100年先まで魅力にあふれ、誇りと愛着を持って住み続けたいと思われるまちとなるよう祈念いたします。「古関裕而氏を活かしたにぎわいの創出に関する調査」の報告いたします。